



その年の夏は地球全体がおかしかった。
ブラジルでは全く雨が降らずアマゾン川が枯れ。
アフリカでは大雨による洪水が発生。
カナダでは記録的な酷暑となり森が燃えた。
新宿の路地裏にいたふたりは何も知らずにいた。それが誰も知らない世界での冒険になる事を。

街頭モニターは普段の映像ではなくブルースクリーンに何かの文字列を表示し、照明や街灯がいたずらに点滅している。道行く人々のスマートフォンからは発信者の分からない着信音が鳴っていた。

日野 勇太小学6年生。この日勇太は1つ歳上の従兄持田 叶と怪獣のオブジェを見るために新宿に来ていた。

「今日って何かトラブルでもあったのかな？」

「よく分からないけど、電車とかにも影響しないといいけど。」

それにしてもなあ勇太もガキだな。小6にもなって怪獣なんてな」

「またあ言う。いいじゃん。今度アメリカで映画するし、去年はなんかハリウッドで賞とかあ！」

「わかった。わかった。って早く見て行こうぜ。あんまこいない方がよさそうだしな。」

周りを見渡すと勇太達の年齢からすると萎縮してしまうような雰囲気の人々がいる。それを遠くから見守るような監視するようにいる数名の警官が異質さを感じさせている。

恐らく叶は自分達…勇太に危害がないか心配して、できればここから早く去りたいのだろう。



集まっているようで、無造作に散らばっている集団の中で着かず離れずだが距離があると感じさせるところひとり座っている少女に勇太の目は留まった。

同じクラスの鬼塚 光であった。

光は小学2年生の冬に勇太の通う学校に転校してきた。

転校してきた当初から光の印象は一貫として【孤立】だった。

ひととは必要最低限しか関わらず、他人が話しかければ邪険に扱い、嫌味のひとつでも言われれば次には「バカ」「役立たず」「目障り」と10の罵倒で返す。

滅多に笑わず、笑うとすれば他人を馬鹿にするなどマイナスの印象を与えるものばかりだった。

当然の事ながらそんな彼女は周囲からの攻撃対象となっていた。

罵倒や無視、いたずら時には直接的な暴力を光は曝された。

勇太には彼らがからかいなのつもりなのか分からない罵倒の言葉は分からなかった…恐らく発している彼らも半分も分かっていないだろう。

だが、彼らの正当性の薄皮を張り付けた攻撃に明確に言語化はできずとも勇太は憤慨していた。

光本人はそんな時には何も感じていないような感情の何もない表情をしていたが勇太にはそれがただ悲しい顔をする以上に心が締め付けられた。

仲裁に入る事もしばしばあったが、光はその事もまるで関係ないように孤立を貫いた。

そして、6年生の頃にはクラスに顔を出すこともなくなっていた。

どうしてるのだろう。大人は話を濁すばかりで教えてくれなかった。



その彼女が目の前にいた。勇太は積極的に女子に話しかけられるタイプではないが、目についた時には叶の「おい、危ないから近づくな」という言葉も耳に入らず反射的に近づいて話しかけていた。

「あっ…えっと鬼塚…さんだよねっ俺同じクラスの…「っ…誰あんた?なにナンパ?キモ…話しかけないで…」

掛けた言葉を遮られてしまい勇太は動揺したがなんとか言葉を続けようとしたが、「ああ!ああ!だから!ウザいし話しかけんなって言ってんのが分かんないの!殺すわよ!」

「…」

取り付く島もない。そういえばこんな感じであった。ちょっと前までの事だったのに完全に忘れていた。

「っ…っ」

光は不安定なスマホをなんとか動かそう勇太に目を合わせないようもしない。

周囲の嘲笑と叶の言わんこっちゃないとい視線に勇太の顔は赤くなっていた。

なんとか話しかけられないか言葉を考えていると視界が急に暗くなった。

先ほどまではなかった黒く厚い雲がいきなり空を覆っていた。

「つめっ…!」

鼻先に当たったものが勇太は瞬間理解できなかった。雪である。

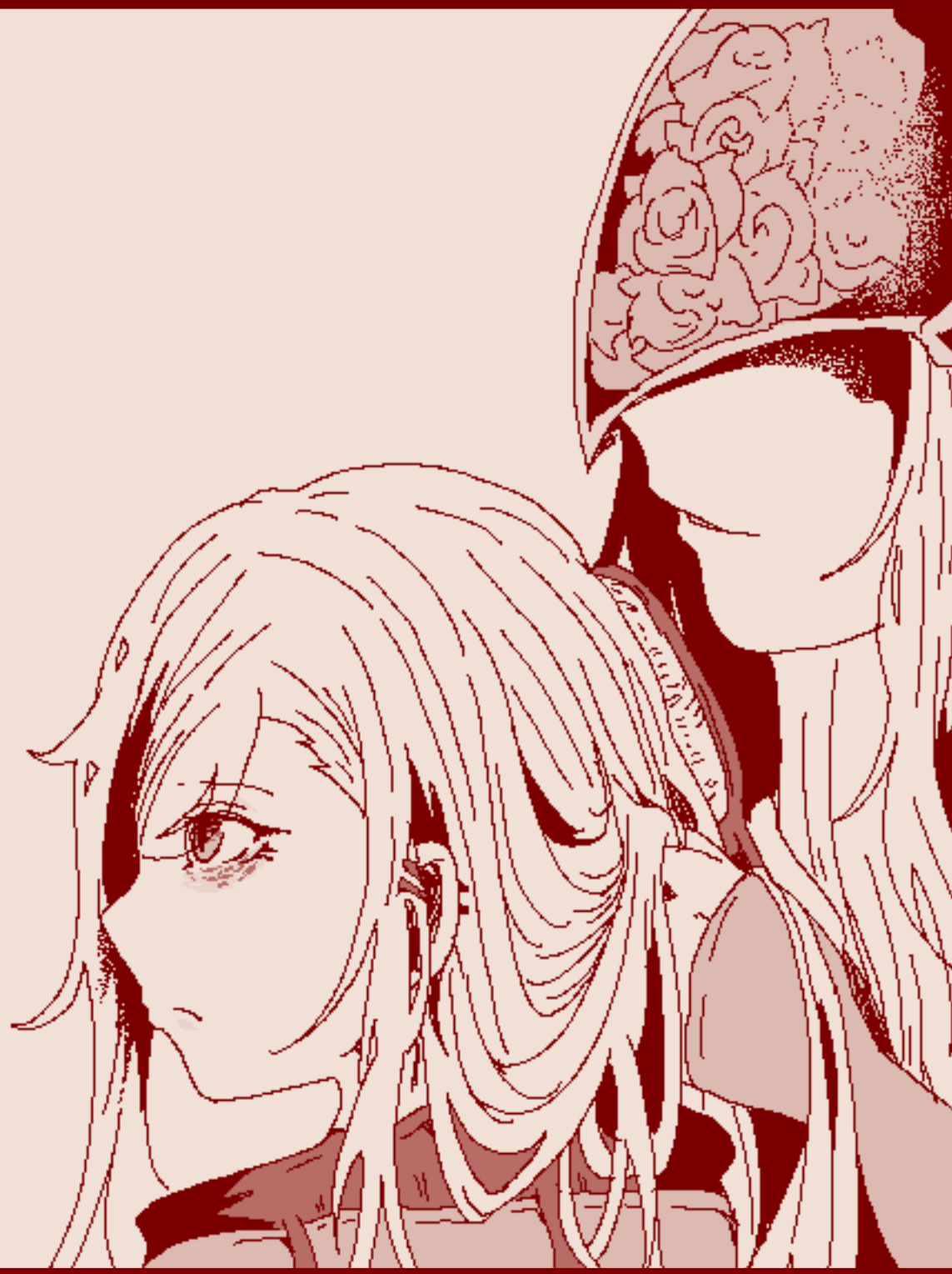
たまにニュースで観る雹ではない。冬に降るようなしんとした雪である。

「ええ嘘だろ…地球温暖化ってやつなのかな」

奇妙さと不安そして非日常への興奮が混じった声で勇太は呟いた。

対照的に従兄は不安そうな顔で空を見ている。

「…?」



雪と雲ののあいまに何かが見えた。
光の卵だった。鼓動している。今にも孵りそうだ。
音がする重低音のラッパのような轟音がどこからか聞こえてくる。
「なに…あれ…」
流石に光もスマホから目を離し空を見上げていた。
光の卵の鼓動が早くなると共に周囲の物が浮かび上がりはじめた。
引っ張られるように勇太と光の身体も浮かび始めた。
「日野君!!!」「鬼塚さん!!」
卵に引っ張られる光を勇太が掴もうと手を伸ばす。
「やめろ!勇太!!こっちに來い!!!」
勇太が従兄を見ると手を伸ばしている。従兄も宙に浮いているが黒い衣装を身にまとった人物に抑えてもらっている。
確かにこのままじゃ自分が危ない従兄の方に勇太の意識が向く。
「日…勇太!…誰か助けて!」
「っ!」
勇太はすぐに振り返り光に手を伸ばした。
なんとか手を掴んだが宙に浮くまいと掴んでいた電灯も卵に吸い込まれて支柱から抜けてしまった。
「うわあああああああああああああ」
卵に吸い込まれる、目の前に光が溢れたと思ったら次には幾つものスクリーンに様々な景色が映し出されているような光景が目に入った。
月面にある電話ボックス。海を走る電車。シルクの糸の上に立つバザール。核の焚火。怒りに満ちた顔でクッキーを焼く肉塊。常に変動するキャンバス。米国尊厳維持局の週末映像。
身体は幾つもの回転し意識が遠のく。ただ握った手だけは確かに掴んでいた。
意識が遠のきそのまま消えていった。



「ここは…。」

鬼塚 圭吾が目覚めたのは見知った自宅リビングであった。
なぜ今のような言葉が出たのか、それは、圭吾が目覚ます前の最後の記憶。
道路を外れ、娘の鬼塚 光に突っ込んで来る車から庇ったところで記憶が途絶えていたからであった。

圭吾はあの事故で自分は死んだと確信していた。

「夢だったのか…。」

「圭吾…?」

「秋子さん?」

声を掛けてきたのは妻の秋子であった。

秋子は信じられないものを見て戸惑っていたが、徐々に顔を崩しながら近づいて来た。

「あっ…」しかし、あと一歩のところまで戸惑っていた。

「?どうしたんですか…?」

圭吾は状況が呑み込めずにいると秋子の後ろから更に声が聞こえてきた。

「パパ…ママ」

「ひか…どうして、あなた…だって今、小学校6年生じゃ…」

秋子が戸惑いと怯えるような表情で光を見ていた。

圭吾には分からなかった、どうして娘を見て怯えているのか、娘は見慣れた5歳の姿でそこにいた。

「パパ!ママ!」

「あっ」

飛びついてくる光を秋子は反射的に屈んで受け止めていた。

そのまま光は圭吾と秋子を一緒に抱きしめた。

「おふ…どうしたんだい?いつもより甘えん坊…で」

瞬間、情報が流れ込み、圭吾と秋子は今の状況を一部を除き理解した。

圭吾はあの日、自分が死んだ事、秋子と光の顛末、光が自分を蘇えらせ、秋子を現実世界から呼んだ事を、この世界は光が用意したものであると。

しかし、光が変わりに犠牲にしたものやデジモンについては知りえなかった。

それは、光が3人だけの世界、幸せの世界に引き籠るために敢えて伝えなかった。

圭吾の記憶の処理が終わり改めて光を見るとそこには小学校6年生の成長した光がいた。

鼓動が鳴り響く、オグドモンの中心のコアになる部分でガルフモン光達がいる幸せの世界を抱きしめるように静かに座っていた。



畳みかけるように降りかかる珍事に気を取られて一緒にやって来たであろう少女の存在を忘れていた。

「勇太!」

悲鳴の方向に勇太は駆け出していた。続いてヴォーボモンも走ってついて来る。鬱蒼とした森を走る事で草木が引っ掛かりところどころ切れている感覚があったか気にしている場合ではないと勇太は足を進めた。

「勇太この悲鳴って!?!」

「きっと鬼塚さんだ!俺と同じ人間の女の子でクソ!すぐに探すべきだったんだ!!」

「まずいよ勇太!最近ここも危ないデジモンが現れたりするんだ!!」

やっぱり見た目どおり危ない奴もいるのかよ!勇太は足を早めた。

声の元へ近づいてくる。

いた!特徴的な銀髪。うずくまっているが間違いなく鬼塚 光だった脅えている彼女の傍らに今に襲いかかりそうに見える赤い恐竜のようなデジモンがいた。

「その子から離れろおっ!!!」

「勇太!ぼくに任せて!プチフレイム!!!」

ヴォーボモンが勢いよく火球を吐き出し赤いデジモンに命中させ吹き飛ばした。

やっぱりこいつら危ないじゃ…そんな場合じゃない!

「鬼塚さん大丈夫!?!」

「あんた…日野!?!どこいったのよ!!???あんたに話掛けられたら空飛ばされて!訳わかんない森の中に飛ばされて!!変な赤い化物に話しかけられて

!!???全部あんたのせいよ!!!!バカ!!カス!!クズ!!!バカバカバカバカ!!!!クソ野郎!!!!!!!!!!!!」



畳みかけるように降りかかる珍事に気を取られて一緒にやって来たであろう少女の存在を忘れていた。

「勇太!」

悲鳴の方向に勇太は駆け出していた。続いてヴォーボモンも走ってついて来る。鬱蒼とした森を走る事で草木が引っ掛かりところどころ切れている感覚があったか気にしている場合ではないと勇太は足を進めた。

「勇太この悲鳴って!?!」

「きっと鬼塚さんだ!俺と同じ人間の女の子でクソ!すぐに探すべきだったんだ!!」

「まずいよ勇太!最近ここも危ないデジモンが現れたりするんだ!!」

やっぱり見た目どおり危ない奴もいるのかよ!勇太は足を早めた。

声の元へ近づいてくる。

いた!特徴的な銀髪。うずくまっているが間違いなく鬼塚 光だった脅えている彼女の傍らに今に襲いかかりそうに見える赤い恐竜のようなデジモンがいた。

「その子から離れろおっ!!!」

「勇太!ぼくに任せて!プチフレイム!!!」

ヴォーボモンが勢いよく火球を吐き出し赤いデジモンに命中させ吹き飛ばした。

やっぱりこいつら危ないじゃ…そんな場合じゃない!

「鬼塚さん大丈夫!?!」

「あんた…日野!?どこいったのよ!!???あんたに話掛けられたら空飛ばされて!訳わかんない森の中に飛ばされて!!変な赤い化物に話しかけられて

!!???全部あんたのせいよ!!!バカ!!カス!!クズ!!!バカバカバカバカ!!!!クソ野郎!!!!!!!!!!!!」



畳みかけるように降りかかる珍事に気を取られて一緒にやって来たであろう少女の存在を忘れていた。

「勇太！」

悲鳴の方向に勇太は駆け出していた。続いてヴォーボモンも走ってついて来る。鬱蒼とした森を走る事で草木が引っ掛かりところどころ切れている感覚があったか気にしている場合ではないと勇太は足を進めた。

「勇太この悲鳴って!？」

「きっと鬼塚さんだ!俺と同じ人間の女の子でクソ!すぐに探すべきだったんだ!!」

「まずいよ勇太!最近ここも危ないデジモンが現れたりするんだ!!」

やっぱり見た目どおり危ない奴もいるのかよ!勇太は足を早めた。

声の元へ近づいてくる。

いた!特徴的な銀髪。うずくまっているが間違いなく鬼塚 光だった

脅えている彼女の傍らに今に襲いかかりそうに見える赤い恐竜のようなデジモンがいた。

「その子から離れろおっ!!!」

「勇太!ぼくに任せて!プチフレイム!!!」

ヴォーボモンが勢いよく火球を吐き出し赤いデジモンに命中させ吹き飛ばした。

やっぱりこいつら危ないじゃ…そんな場合じゃない!

「鬼塚さん大丈夫!？」

「あんた…日野!?!どこいったのよ!!???あんたに話掛けられたら空飛ばされて!訳わかんない森の中に飛ばされて!!変な赤い化物に話しかけられて

!!???全部あんたのせいよ!!!バカ!!カス!!クズ!!!バカバカバカバカ!!!!クソ野郎!!!!!!!!!!!!」



畳みかけるように降りかかる珍事に気を取られて一緒にやって来たであろう少女の存在を忘れていた。

「勇太！」

悲鳴の方向に勇太は駆け出していた。続いてヴォーボモンも走ってついて来る。鬱蒼とした森を走る事で草木が引っ掛かりところどころ切れている感覚があったか気にしている場合ではないと勇太は足を進めた。

「勇太この悲鳴って!？」

「きっと鬼塚さんだ!俺と同じ人間の女の子でクソ!すぐに探すべきだったんだ!!」

「まずいよ勇太!最近ここも危ないデジモンが現れたりするんだ!!」

やっぱり見た目どおり危ない奴もいるのかよ!勇太は足を早めた。

声の元へ近づいてくる。

いた!特徴的な銀髪。うずくまっているが間違いなく鬼塚 光だった脅えている彼女の傍らに今に襲いかかりそうに見える赤い恐竜のようなデジモンがいた。

「その子から離れろおっ!!!」

「勇太!ぼくに任せて!プチフレイム!!!」

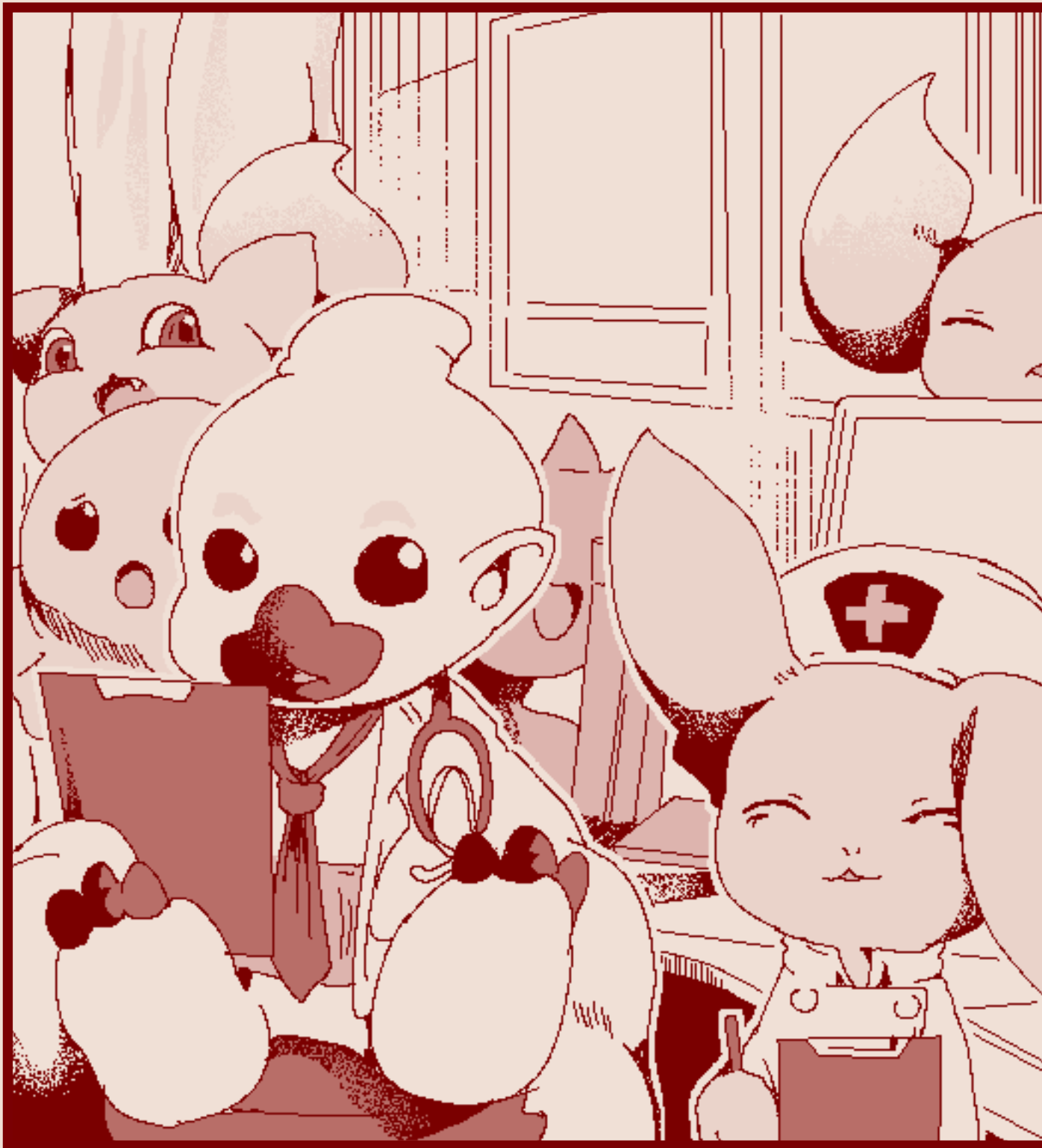
ヴォーボモンが勢いよく火球を吐き出し赤いデジモンに命中させ吹き飛ばした。

やっぱりこいつら危ないじゃ…そんな場合じゃない!

「鬼塚さん大丈夫!？」

「あんた…日野!?どこいったのよ!!???あんたに話掛けられたら空飛ばされて!訳わかんない森の中に飛ばされて!!変な赤い化物に話しかけられて

!!???全部あんたのせいよ!!!バカ!!カス!!クズ!!!バカバカバカバカ!!!!クソ野郎!!!!!!!!!!!!」



その年の夏は地球全体がおかしかった。
ブラジルでは全く雨が降らずアマゾン川が枯れ。
アフリカでは大雨による洪水が発生。
カナダでは記録的な酷暑となり森が燃えた。
新宿の路地裏にいたふたりは何も知らずにいた。それが誰も知らない世界での冒険になる事を。

街頭モニターは普段の映像ではなくブルースクリーンに何かの文字列を表示し、照明や街灯がいたずらに点滅している。道行く人々のスマートフォンからは発信者の分からない着信音が鳴っていた。

日野 勇太小学6年生。この日勇太は1つ歳上の従兄持田 叶と怪獣のオブジェを見るために新宿に来ていた。

「今日って何かトラブルでもあったのかな？」

「よく分からないけど、電車とかにも影響しないといいけど。」

それにしてもなあ勇太もガキだな。小6にもなって怪獣なんてな」

「またあ言う。いいじゃん。今度アメリカで映画するし、去年はなんかハリウッドで賞とかあ！」

「わかった。わかった。って早く見て行こうぜ。あんまこいない方がよさそうだしな。」

周りを見渡すと勇太達の年齢からすると萎縮してしまうような雰囲気の人々がいる。それを遠くから見守るような監視するようにいる数名の警官が異質さを感じさせている。

恐らく叶は自分達…勇太に危害がないか心配して、できればここから早く去りたいのだろう。



集まっているようで、無造作に散らばっている集団の中で着かず離れずだが距離があると感じさせるところひとり座っている少女に勇太の目は留まった。

同じクラスの鬼塚 光であった。

光は小学2年生の冬に勇太の通う学校に転校してきた。

転校してきた当初から光の印象は一貫として【孤立】だった。

ひととは必要最低限しか関わらず、他人が話しかければ邪険に扱い、嫌味のひとつでも言われれば次には「バカ」「役立たず」「目障り」と10の罵倒で返す。

滅多に笑わず、笑うとすれば他人を馬鹿にするなどマイナスの印象を与えるものばかりだった。

当然の事ながらそんな彼女は周囲からの攻撃対象となっていた。

罵倒や無視、いたずら時には直接的な暴力を光は曝された。

勇太には彼らがからかいなのつもりなのか分からない罵倒の言葉は分からなかった…恐らく発している彼らも半分も分かっていないだろう。

だが、彼らの正当性の薄皮を張り付けた攻撃に明確に言語化はできずとも勇太は憤慨していた。

光本人はそんな時には何も感じていないような感情の何もない表情をしていたが勇太にはそれがただ悲しい顔をする以上に心が締め付けられた。

仲裁に入る事もしばしばあったが、光はその事もまるで関係ないように孤立を貫いた。

そして、6年生の頃にはクラスに顔を出すこともなくなっていた。

どうしてるのだろう。大人は話を濁すばかりで教えてくれなかった。



その彼女が目の前にいた。勇太は積極的に女子に話しかけられるタイプではないが、目についた時には叶の「おい、危ないから近づくな」という言葉も耳に入らず反射的に近づいて話しかけていた。

「あっ…えっと鬼塚…さんだよねっ俺同じクラスの…「っ…誰あんた?なにナンパ?キモ…話しかけないで…」

掛けた言葉を遮られてしまい勇太は動揺したがなんとか言葉を続けようとしたが、「ああ!ああ!だから!ウザいし話しかけんなって言ってんのが分かんないの!殺すわよ!」

「…」

取り付く島もない。そういえばこんな感じであった。ちょっと前までの事だったのに完全に忘れていた。

「っ…っ」

光は不安定なスマホをなんとか動かそう勇太に目を合わせないようもしない。周囲の嘲笑と叶の言わんこっちゃないとい視線に勇太の顔は赤くなっていた。なんとか話しかけられないか言葉を考えていると視界が急に暗くなった。先ほどまではなかった黒く厚い雲がいきなり空を覆っていた。

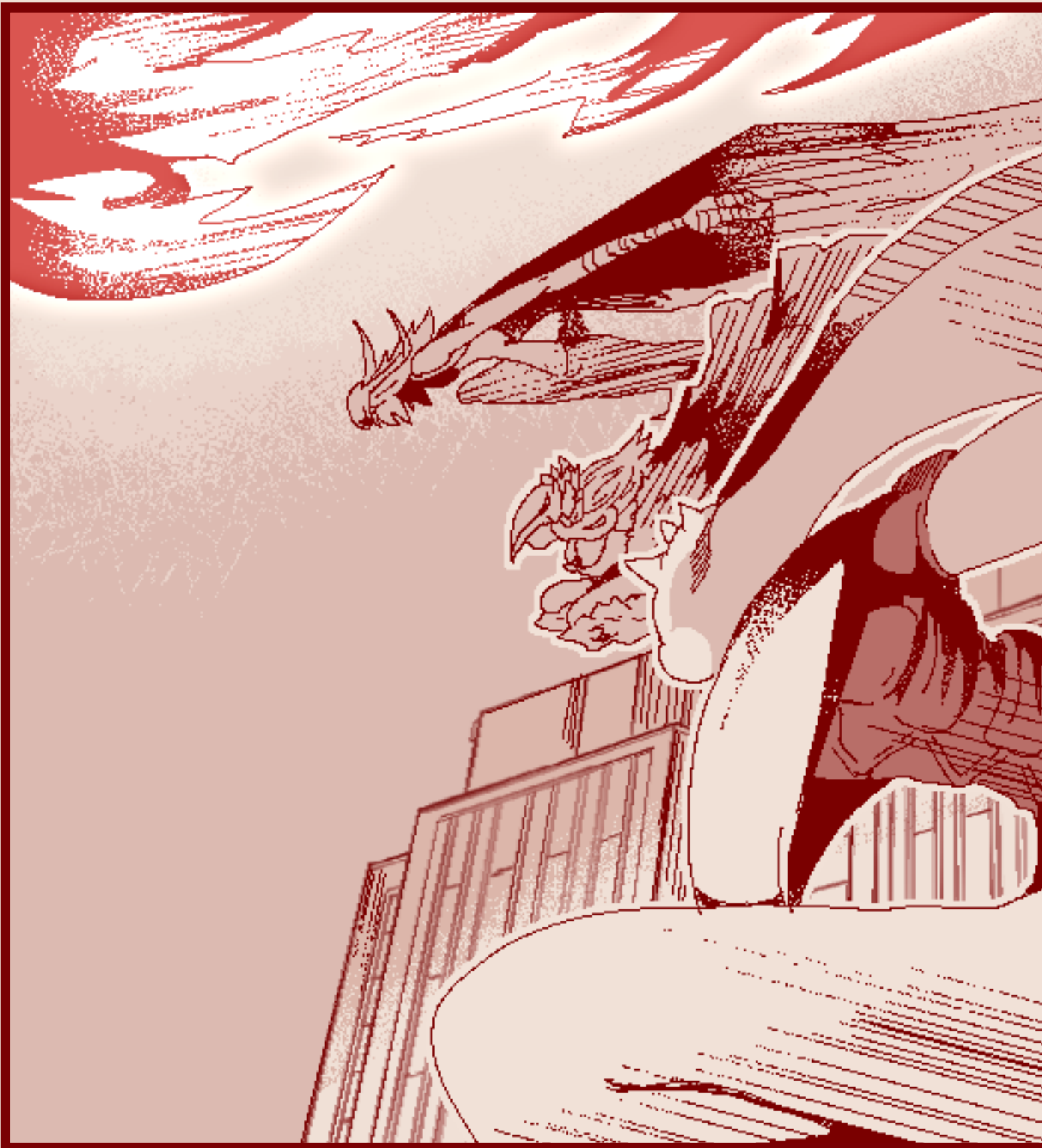
「つめっ…!」

鼻先に当たったものが勇太は瞬間理解できなかった。雪である。たまにニュースで観る雪ではない。冬に降るようなしんとした雪である。

「ええ嘘だろ…地球温暖化ってやつなのかな」

奇妙さと不安そして非日常への興奮が混じった声で勇太は呟いた。対照的に従兄は不安そうな顔で空を見ている。

「…?」



雪と雲ののあいまに何かが見えた。
光の卵だった。鼓動している。今にも孵りそうだ。
音がする重低音のラップのような轟音がどこからか聞こえてくる。
「なに…あれ…」

流石に光もスマホから目を離し空を見上げていた。
光の卵の鼓動が早くなると共に周囲の物が浮かび上がりはじめた。
引っ張られるように勇太と光の身体も浮かび始めた。

「日野君!!!」「鬼塚さん!!」

卵に引っ張られる光を勇太が掴もうと手を伸ばす。

「やめろ!勇太!!こっちに來い!!!」

勇太が従兄を見ると手を伸ばしている。従兄も宙に浮いているが黒い衣装を身にまとった人物に抑えてもらっている。

確かにこのままじゃ自分が危ない従兄の方に勇太の意識が向く。

「日…勇太!…誰か助けて!」

「っ!」

勇太はすぐに振り返り光に手を伸ばした。

なんとか手を掴んだが宙に浮くまいと掴んでいた電灯も卵に吸い込まれて支柱から抜けてしまった。

「うわあああああああああああああ」

卵に吸い込まれる、目の前に光が溢れたと思ったら次には幾つものスクリーンに様々な景色が映し出されているような光景が目に入った。

月面にある電話ボックス。海を走る電車。シルクの糸の上に立つバザール。核の焚火。怒りに満ちた顔でクッキーを焼く肉塊。常に変動するキャンバス。米国尊厳維持局の週末映像。

身体は幾つも回転し意識が遠のく。ただ握った手だけは確かに掴んでいた。
意識が遠のきそのまま消えていった。



「ここは…。」

鬼塚 圭吾が目覚めたのは見知った自宅リビングであった。
なぜ今のような言葉が出たのか、それは、圭吾が目覚ます前の最後の記憶。
道路を外れ、娘の鬼塚 光に突っ込んで来る車から庇ったところで記憶が途絶えていたからであった。

圭吾はあの事故で自分は死んだと確信していた。

「夢だったのか…。」

「圭吾…?」

「秋子さん?」

声を掛けてきたのは妻の秋子であった。

秋子は信じられないものを見て戸惑っていたが、徐々に顔を崩しながら近づいて来た。

「あっ…」しかし、あと一歩のところまで戸惑っていた。

「?どうしたんですか…?」

圭吾は状況が呑み込めずにいると秋子の後ろから更に声が聞こえてきた。

「パパ…ママ」

「ひか…どうして、あなた…だって今、小学校6年生じゃ…」

秋子が戸惑いと怯えるような表情で光を見ていた。

圭吾には分からなかった、どうして娘を見て怯えているのか、娘は見慣れた5歳の姿でそこにいた。

「パパ!ママ!」

「あっ」

飛びついてくる光を秋子は反射的に屈んで受け止めていた。

そのまま光は圭吾と秋子を一緒に抱きしめた。

「おふ…どうしたんだい?いつもより甘えん坊…で」

瞬間、情報が流れ込み、圭吾と秋子は今の状況を一部を除き理解した。

圭吾はあの日、自分が死んだ事、秋子と光の顛末、光が自分を蘇えらせ、秋子を現実世界から呼んだ事を、この世界は光が用意したものであると。

しかし、光が変わりに犠牲にしたものやデジモンについては知りえなかった。

それは、光が3人だけの世界、幸せの世界に引き籠るために敢えて伝えなかった。

圭吾の記憶の処理が終わり改めて光を見るとそこには小学校6年生の成長した光がいた。

鼓動が鳴り響く、オグドモンの中心のコアになる部分でガルフモン光達がいる幸せの世界を抱きしめるように静かに座っていた。

